

経営トップが「誰よりも努力する背中」を見せ、世界基準の安全と医療の質を提供する市民病院。



SHIMIZU YUKIHIRO
南砺市民病院 院長

清水幸裕

1982年 富山医科薬科大学（現富山大学）医学部医学科卒業、1986年富山医科薬科大学大学院医学系研究科修了。同大学や京都桂病院で研修し、米国ピッツバーグ癌研究所及び米国スクリプス研究所への留学で肝疾患の免疫学的研究を行う。2014年より南砺市民病院院長を務める。

高い志をもった職員とともに地域包括医療・ケアを実践する南砺市民病院の清水幸裕院長。すべての医療の基盤である患者安全と医療の質、臨床倫理を軸に、患者の命や生活と真摯に向き合い続けている。

富

山県南西部に位置する南砺市。田園に広がる散居村や世界遺産の合掌造り集落など、美しい日本の原風景を今に伝えている。この地域で人々の健康を守り続けるのが、公立病院である南砺市民病院だ。病床数175と小規模ながら、病院専用のドクターカーの運用や、世界でもっとも厳しい基準を提示する国際医療機能評価であるJCI認証を取得するなど、革新的な取り組みを展開。その実現の源が、院長である清水幸裕氏の「道を切り拓く力」だ。

清水氏は、1982年に富山医科薬科大学（現富山大学）医学部を1期生として卒業。消化器内科医として研修を受けた後、88年に渡米。何のコンケションもないため、自らの足で研究所まで辿り着いた。数年後、清水氏に続くように大学の後輩が数名、同じ米国ピッツバーグ癌研究所に留学している。

「道をつくと云えば格好良いのですが、要は人が敷いたレールに乗るのが好きではないのです」と笑う清水氏。2度の留学

を経て、2014年に南砺市民病院院長に就任する。20年には、救急車の要請と同時に病院から出動するドクターカー運用を開始した。医師や看護師がいち早く初期診断と治療を開始することで救命率の向上や後遺症の軽減が期待され、これまでの出動回数は千回以上に及ぶ。

「救急医療の原則は、1秒でも早く医療者が患者さんに接触すること。それなのに、病院で待っていてよいかという葛藤が長年ありました。運用を開始し、手応えとして感じるのは、『ドクターが来てくれた』という現場の方の安心感。地域医療にとって、もっとも大切なことだと思います。」

清

水氏がドクターカーを立ち上げたきっかけは、隣の市で起きた高速道路でのバス事故により、亡くなった運転手の話だった。搬送先である総合病院の院長が、清水氏にこうつぶやいた。「現場で点滴1本打てば助けられたのに」。医療ドラマなどの影響で、救命救急には派手な処置をするイメージもあるが、現実には点滴1本が生死を分けることがある。そうした命をひとつでも多く助けたいと、清水氏は力強く語る。

構想から実現までは約1年を要し、困難も多くあった。そのひとつは、記者発表の前日に救急チームの医師が「自信がない」と言い出したことだ。

「最初は怖かったのですが、出動し始めると、皆がもつと現場に出たいと自信を覗かせるようになりました。医者の本能が目覚めたのだと思います。」

も

うひとつ清水氏にとって大きな挑戦となったのが、JCI（国際医療機能評価）認証だ。病院には、第三者が組織の運営管理及び提供される医療を評価する「医療機能評価」と呼ばれる指標がある。病院全体で医療の質や安全への意識を高め、患者の信頼を得ることが目的だ。JCIは世界でもっとも厳しい基準を持つ。1200以上の測定項目がある。南砺市民病院は21年12月に認証取得し、自治体病院として、さらに北陸三県としても初の快挙となった。申請に必要な書類はすべて清水氏が英訳している。その熱量は「人生のすべての経験がJCI認証に活かしている」と自認するほどだ。

「チャンスを与えられて、急に実現できる人はいません。大事なものは、たとえ報われなくても準備をすること。私は2度の米

国生活で英語を習得し、富山に戻ってからもずっと英語に触れていました。JCIは、医療機関にとって世界でもっとも厳しく高い山。いきなり越えることは難しくても、一步一步登っていけば、何かあっても簡単には崩れない。職員にも、小さいけれど世界で最高のものを目指し続ける病院であることに誇りを持つてほしいです。」

CHALLENGER

The Extra Edge

世の中のトレンドをリードする話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介

3回日本地域医療学会の学会長を務めることになった清水氏。保健、医療、介護、福祉を総合的に実践する地域医療の普及を目指した学会であり、自身にとって大きな挑戦だという。同時期に重なる大仕事の乗り越え方を尋ねると、「誰よりも努力をすること」というシンプルな答えが返ってきた。

「誰よりも勉強し、誰よりも苦しむのがトップの役目。部下ができないことを責めたりせず、自ら行動して見せることが大事です。目の前に2つ道があったら、迷わず困難な方へ。僕はこの生き方が一番幸せです。これしかできないし、自分が納得した生き方を選びたいから」と語る清水氏は、これからも厳しい山を登り続けていくのだろう。